

博 士 学 位 論 文

論文要旨

および

審査結果の要旨

博甲第 19 号

2025 年 3 月

目白大学大学院心理学研究科

はしがき

この冊子は、学位規則（昭和28年文部省令第9号）第8条による公表を目的として、2025年3月に本学において授与した博士（心理学）の学位について、論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は本学大学院学則第32条3項の要件を満たしたものであることを示す。

氏名	安藤 智子
学位の名称	博士（心理学）
学位番号	博甲第19号
学位授与年月日	2025年3月27日
授与機関	目白大学大学院
学位論文題目	日本人大学生の異文化間葛藤場面における アサーションに関する研究 ——海外渡航前教育教材の開発と実践の試み——
論文審査委員	主査 目白大学大学院心理学研究科教授 加賀美 常美代 副査 目白大学大学院心理学研究科教授 小野寺 敦子 副査 目白大学大学院心理学研究科教授 今野 裕之

学位論文要旨

アメリカで始まったアサーション研究は、日本においては平木（1993）によってその概念が広まり、教育、臨床、医療などの現場で実践的に取り扱われることが多くなった（菅沼, 2011）。しかしながら、異文化接触面における具体的な分析やトレーニングの方策についての研究は僅少で、実証的な研究の必要性があった。

本研究の目的は、第1に、日本人大学生のアサーションは他の国の大学生と異なっているのか比較検討することである。第2に、日本人大学生が、海外生活で実際に経験する異文化間葛藤場面にはどのような傾向があるのかを検討することである。第3に、それらの知見のもと、日本人大学生のアサーション教育に資するオリジナルの教材を作成し、その教材を用いた教育実践を行い日本人大学生の学びを検討することである。

第Ⅰ部では、実証研究に先立ち、研究の背景と先行研究について概説した。まず、葛藤及び異文化間葛藤に関する諸理論について論じ、次に、アサーションの心理学的な研究の発展についてまとめた後、アサーションの国際比較研究について国内外の研究を概観した。その結果、アサーションの比較研究が欧米対アジアの比較に留まり、アジア諸国の間のアサーションの違いが未だ明らかになっていないことが示唆された（研究1）。

第Ⅱ部では、アサーションの実証研究として国際比較研究を行った。日本人大学生のアサーションの様相を明らかにするために、日本在住の留学生と日本人大学生のアサーション度について、アサーションチェックリスト（平木, 2003）及び、SCAT（菅沼, 2002）を援用し、両者のアサーション度の差を比較検討した（研究2）。その結果、日本人大学生は留学生と比較してアサーションの度合いが低く、受け身的な行動を予測していることが示された。また、日本人大学生が特に苦手と感じているのは、誘いや断りの場面、質問する、意見を言うなどのアカデミックスキルの場面であった。次に、米国、中国、タイの海外大学生と日本人大学生を対象に「青年用アサーション尺度」（玉瀬他, 2001）を援用して質問紙調査を実施し、一元配置分散分析及び多重比較により各群に差があるかを分析した。その結果、大学生のアサーション度全体では「日本」＜「タイ」＜「アメリカ・中

国」の間に有意差があった。また、因子別では、関係形成因子、説得交渉因子のどちらも国籍による差が有意であり、関係形成因子においては、「日本」＜「中国・タイ」＜「アメリカ」の間に、説得交渉因子においては、「日本」＜「アメリカ・中国・タイ」との間に有意差があることが明らかとなった。さらに、性差に関してt検定を行ったところ、アサーション度全体における男女による平均値の差が日本人大学生のみ有意であった。以上のように日本人大学生は海外大学生と比較してアサーション度が低く受け身的な傾向が強いことが認められた（研究3）。

第Ⅲ部では、アサーションの実践研究を行った。同じアジア圏の大学生と比較してもアサーション度の低い日本人大学生は、海外留学など異文化環境の中で、様々な葛藤を感じやすいのではないかと予測される。そのため、日本人大学生が、海外生活において遭遇する異文化間葛藤について検討することとした（研究4）。海外渡航経験のある日本人大学生・大学院生（56名）を対象に、自由記述式の質問紙調査を行い、葛藤事例の収集を行った。収集されたデータはKJ法を用いて分類を行い分析した。その結果、126件の事例から以下の6つの大カテゴリー（1「パブリック場面における葛藤」、2「居住場面における葛藤」、3「アカデミック場面における葛藤」、4「友人関係における葛藤」、5「見知らぬ人との交流場面における葛藤」、6「異性関係における葛藤」）が見いだされた。大カテゴリーのうち1, 2, 3については、説得交渉因子に関わる内容で件数が多かった。4, 5, 6のカテゴリーは関係形成因子に関わる内容であり、長期留学で経験しやすい葛藤場面であることも示された。次に、収集された異文化間葛藤事例をもとに、アサーション・トレーニングのための教材を作成した（研究5）。この教材は、海外渡航前の日本人大学生を主な対象とし異文化間葛藤場面におけるアサーションのトレーニングを主題としている。教材の作成は、事例の選別、執筆、翻訳、加筆と修正を繰り返しながら行った。また、1. 具体的葛藤場面の提示、2. 葛藤場面における対処行動の選択、3. DESC法によるアサーティブコミュニケーション表現の練習、4. 日本語と英語の模擬会話による会話練習という4つのステップで無理なく大学生が学習できる構成とした。教材の特徴は、模擬事例の活用、モジュール式とステップの積み上げによるスキル学習、具体的会話例（日

英)の例示,日本人大学生への馴染みやすさへの配慮の4つがあげられる。

さらに,作成した教材を海外渡航前の日本人大学生(4名)に試用して,アサーションに関する教育実践を行った(研究6)。実践の概要は,アサーションの基本,アサーションの具体的スキル,ディスカッションを主なテーマとした全3回で,各120分間行った。研修の参加者からは,研修前後に「青年用アサーション尺度」(玉瀬他,2001)と,SCAT(菅沼,2002)に回答を得た。研修の前後の変化について,参加者全体の平均値には大きな変化は見られなかったが,説得交渉因子については,研修後に若干高くなる傾向にあった。SCATでは,個別の学生の変化を検討した。研修後にアサーションの得点が高くなった学生,得点にほとんど変化がなかった学生,攻撃的行動が減少した学生というように,結果には個人差が認められた。また,3回の各研修後にリフレクションペーパーへの記入を求めた。研修参加者は,アサーションに対する驚きや自分自身のコミュニケーションへの気づきについて感想を述べていた。また,研修後半には,アサーティブなコミュニケーションに対する自信を感じる学生もいれば,アサーションの不安を感じる学生もいた。

第Ⅳ部では,第Ⅲ部までの結果を踏まえ,総合的考察を行った。第1に,日本人大学生のアサーション度の低さについては,同じアジア諸国と比較しても,日本人大学生のアサーションは低いことが示されたが,その理由として,民族多様性の観点,自己認識の観点,教育の観点から考察し論じた。アジア諸国には歴史的に民族の多様性がある国も多いばかりでなく,近年の国際化により多様な価値観を持つ人々との共生が進み,想像以上に低文脈な明示的コミュニケーション(Hall,1976)を人々は行っているのではないかと考えられる。第2に,異文化間葛藤場面が必要とされるアサーションのスキルは何かという問題については,特に,質問する,意見を表明するなどアカデミックな場面や,誘う断るなどの場面において心理的な負荷が高いスキルが必要とされていることが示された。日本の学校教育,家庭教育の中でこのようなスキルを伸ばしていない場合,突然海外の異なる文化の中で生活すると様々な葛藤や困難を感じる可能性があることが考えられる。したがって,他者尊重は重視しつつも,自分の感情や希望を伝えたいときに伝えられるアサーション・トレーニングが必要であると考えられる。第3に,海外渡航前の研修については,

一般的に実施されている留学手続きの説明会や単なる語学研修とは別に、異文化におけるアサーション・トレーニングを実施することで、海外渡航前研修において重要な役割を果たすことについて言及した。

最後に本研究の意義と今後の課題を述べる。本研究の学術的意義は、中国・タイを含めたアジア地域とアメリカと日本という多国籍間でのアサーション度の比較検討を行その違いを示した点であり、また、文化習慣の異なる海外での生活においてどのような葛藤を感じ、経験しているのかを具体的なカテゴリー分類によって明示できたことである。教育的な意義として、異文化接触の増加している現代の日本において、また、政府の海外派遣の推進が促進される中で、大学生のアサーションについて検討し、その教育の方法を模索し、一つの教育実践を試行したことは重要であろう。今後は、アサーション行動の測定について質的な研究方法を取り入れていくこと、また、参加者数や研修時間を増やしたより充実したアサーションの教育実践を行い、その効果研究に取り組み、教材の改善にも取り組んでいくことが課題である。

審査結果の要旨

博士学位請求論文について、審査委員会では次の観点から、審査を実施した。

論文の批評

先行研究の精査：日本における海外留学の現状と異文化間葛藤の状況、アサーションの比較研究及び国内外の研究動向を概観しており、先行研究を十分に検討し精査している。

研究の独自性：中国・タイ・アメリカ・日本という多国籍間でのアサーション度の比較検討を行い、日本人大学生のアサーション度の低さと学生間の差異を実証的に示した点である。また、文化習慣の異なる海外生活の葛藤内容を事例収集から具体的なカテゴリー分類を行い、それらを用いて教育教材を開発した点も独自性として評価できる。

論理性：先行研究に基づき適切に問題提起を行い、質問紙調査の分析結果から妥当な解釈を行っている。さらに、その後続く事例研究から教材開発、教育実践の試行を連結させており、博士論文として論理的な構成がなされている。

実証性：国内の留学生および国内外の大学生を対象としたアサーションの国際比較調査を行った点、海外の異文化間葛藤事例を収集し質的分析を実施した点など、海外のデータ収集と分析については困難を極めるため、実証性という点でも評価できる。

資料分析の妥当性と信頼性：内的妥当性を確保するために信頼できる心理尺度を用いて検討している点が評価できる。また、日本人学生を対象にした海外留学希望者に適用可能な知見、一般性を有している。

今後の展開の可能性：開発教材を用いた教育実践の試行については、海外留学予定者の参加人数が少なく実践的課題が残るが、今後は対象者の数を増やし継続的に介入研究を行うことで、本研究の発展性、高等教育における貢献度が期待できる。

総合評価

本研究は日本人大学生のアサーションに着目し留学生と他国の大学生との国際比較を検討し、海外で直面する異文化間葛藤の事例収集・分類し教材開発を行い、海外留学を目指す学生に教育実践を試行しその学び検討したものである。近年のグローバル化と大学教育において海外派遣留学が促進される中で、日本人大学生のアサーション度の低さに注目し、海外留学前のアサーションの事前教育方法を模索し、教育実践を試行した点で、学術

的研究だけでなく大学教育としても貢献度が高く、教育的意義が大きいといえる。今後は、海外留学を希望するより多くの対象者に、事前事後の効果研究を検討し、オリジナル教材の有効性についても検証することが期待される。以上のことから、研究意義、独自性、論性等の観点から、博士学位論文として十分な内容と質を備えていると判断し合格と判定するものである。

最終試験の要旨

最終試験結果

本研究はグローバル化する海外留学の現状から、日本人大学生のアサーションに着目し、留学生と他国の大学生との国際比較を検討し、海外で直面する異文化間葛藤の事例を収集し分類し教材開発を行い、海外留学を目指す学生に教育実践を試行しその学びを検討したものである。

本論文は学位論文審査において合格し、2月10日に最終審査・公開発表会が開催された。参加者は目白大学大学院心理学研究科後期博士課程教授および大学院生であった。公開発表では、発表者は各章の要旨を簡単に論じ本研究で得られた知見を整理し、調査研究から解明した結果を論じた。それらをもとに、海外留学を目指す学生のための教育教材の開発・教育実践を行った結果と総合的考察、本研究の意義、今後の課題について言及した。

公開発表は明晰かつわかりやすい発表であり、審査委員および博士課程の教授の質問に対して真摯な態度で的確に応答した。最終試験では、論文内容、周辺領域の知識について口頭で説明を求められた。質問内容は、自己主張性についてアドボカシーの観点からの見解、アサーションと自立性に関する課題、アサーションに至るまでの過程の研究などについてであった。これらの質問については、発表者から十分に説明がなされ適切な回答が得られた。以上のことから、審査委員会では、博士学位論文の水準と最終試験を審査した結果、最終試験を「合格」と判定した。

最終結論

審査委員会では、以上の学位論文審査と最終試験の結果を踏まえたうえで、最終結論として博士(心理学)の学位授与に値するものと、博士課程の教授の全員一致で学位授与を決定した。